[head](file:///E:\岩倉紙芝居\koten\koten.htm)（岩倉紙芝居館古典館<http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koten.htm>）　宰主　上田啓之

『荀子』議兵篇に、臨武君の言として「孫（子）・呉（子）も之（勢利、変詐、感忽、悠闇）を用いて、天下に敵無し」とあり、『韓非子』五蠧篇には、「孫・呉の書を蔵する者は、家ごとに之れ有り」、さりとて兵は弱いと嘆いており、戦国時代に広く普及していたとされる。司馬遷は「孫子・呉起列伝」を著し、呉王の闔閭（こうりょ、在位BC514-496）に仕えた斉人の孫武、その百年後の子孫、斉の田忌に仕えた孫臏の事績（桂陵の戦BC353、馬陵の戦BC341）、孔子の高弟の曾子の弟子であり、後に魏の文候（在位BC445-396）、武候（在位BC395-370）に仕えた衛人の呉岐の事績を記した。『漢書』芸文志・兵権謀家類には、『呉孫子兵法』82巻・図9巻、『漢書』30巻・志第10に「斉の孫子89編、図4巻」とあり、 顔師古がこれに「孫殯」と注 している。現テキストは13編であり、魏の曹操（武王）が編纂注した『魏武注孫子』による。  
1972年、山東省銀雀山の前漢時代の墳墓から『竹簡孫子』や『孫殯兵法』の竹簡が出土し、『呉孫子兵法82巻・図9巻』と『斉の孫子（孫殯）89編、図4巻』は別物で、孫殯の兵法書は伝わっておらず、『呉孫子兵法』が継承されていることが判明したそうである。孫武の記したものが、後継者により82巻・図9巻に膨れあがり、曹操が基本となる部分に簡略化したとされる。続日本記、天平宝字四年（760年）十一月丙申条に、「舍人の春日部三関に刀を授け、中衛舍人土師宿禰関成等六人を大宰府に遣はし、大弐吉備朝臣真備に就かせ、諸葛亮八陳と孫子九地及び結営向背を習はしむ」とあり、「孫子」はこの時代から我が国でも読まれていた。  
  
   
  
、、、、、、、、  
孫子曰く、地形には、通（つう）なる者あり、挂（かい）なる者あり、支（し）なる者あり、隘（あい）なる者あり、険（けん）なる者あり、遠（えん）なる者あり。  
■戦場が何処で、如何なる地形であるかを知り、どちらが先に到達し、如何なる勢力で、如何なる布陣をしているかを想定し、それを如何なる勢力で対応するかを準備しなければならない。また、兵站、補給路の確保が不可欠となる。  
  
、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、  
われもって往（ゆ）くべく、彼もって来たるべきを通（つう）という。通なる形（けい）には、まず高陽（こうよう）に居おり、糧道（りょうどう）を利してもって戦わば、すなわち利あり。もって往（ゆ）くべく、もって返り難（がた）きを挂（かい）という。挂（かい）なる形（けい）には、敵に備（そな）えなければ出いでてこれに勝ち、敵もし備えあらば出でて勝たず。もって返り難（がた）くして、不利なり。われ出でて不利、彼も出でて不利なるを支（し）という。支（し）なる形（けい）には、敵、われを利すといえども、われ出（い）ずることなかれ。引きてこれを去り、敵をして半（なか）ば出でしめてこれを撃つは利（り）なり。  
■通、は辶と甬からなり、甬は桶、空洞にして通達するもの、双方にとって往来に支障の無い地形。■高陽、高くて見通しのよいこと。兵站と補給路を確保して戦うことが肝要。諸家は人に致し、人に致されるなと注している。■挂、は扌（手）と圭からなる。圭は天子が諸侯を封じる際にその身分を示す方形の玉であるが、それは土地の神を祭る盛り土の形（漢字の覚え方、圭；[HP](http://huusennarare.cocolog-nifty.com/blog/2015/02/post-e566.html)）からくる。圭を手で引っかけ吊す形で、挂冠とは官職を辞すること、宙ぶらりんの状態。ここでは、行ったが戻れない状態。敵の不意を突いておれば抜けるが、伏兵を以て迎撃されれば、袋の鼠となる。■支、支柱、支持の支で双方がもたれかかっている様。膠着状態。相手が利で釣ることがあり、乗せられてはならない。逆に引け、誘い出し、その隊列が整う前に精鋭で逆襲すべし。  
  
、、、、、、、、、、、、、、、、、　隘（あい）なる形（けい）には、われまずこれに居らば、必ずこれを盈（み）たしてもって敵を待つ。もし敵まずこれに居り、盈（み）つればすなわち従うことなかれ、盈（み）たざればすなわちこれに従え。険（けん）なる形（けい）には、われまずこれに居らば、必ず高陽（こうよう）に居りてもって敵を待つ。もし敵まずこれに居らば、引きてこれを去りて従うことなかれ。遠（えん）なる形（けい）には、勢い均（ひと）しければもって戦いを挑いどみ難く、戦えばすなわち不利（ふり）なり。およそこの六者（ろくしゃ）は地の道なり。将（しょう）の至任（しにん）、察（さっ）せざるべからず。  
■隘は阝と益からなり、益には溢yìと縊yì.のふたつの意味がある。溢は皿から水が溢れでること。縊は袋の口を糸で縛ること。阝は聖所に神が降りる梯が原義で、狭い通路のこと、ここでは、隘は袋の口のような地形。■盈は豊満な肢体の人が盥（たらい）に坐して水が溢れ出るさま。出入り口の狭い地形では、そこを充たすことが重要。敵が先に充たしておれば、攻めることなく、敵兵を引き外におびき出し戦え、口を開けておれば、そこを自兵で充たせ。■險、易に、「天險は升るべからず、地險は山川丘陵なり。王公險を設け、以てその國を守る。險の時用、大なるかな」とある。登降するに難しい地形。■髙陽は高く陽当り良く、見通しの良い所。敵が先にその地に居れば、攻めず、引きて平地に誘い出せ。あるいは、糧道を絶て。■遠形とは自陣と敵陣の間が遠く離れていること。勢力が等しければ、敵陣に攻める側は、辿り着くに既に疲労をしており、不利。■地形の利、不利で兵力が増減する。■不察、将が任に就かば、この道を察す事が出来ねばならない、と釈されるが、将を任命するには、主君はこの道を熟知し、実際に運用できる者を選ばねばならない。  
  
、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、　ゆえに兵には、走（そう）なるものあり、弛（し）なるものあり、陥（かん）なるものあり、崩（ほう）なるものあり、乱（らん）なるものあり、北（ほく）なるものあり。およそこの六者（ろくしゃ）は、天地の災（わざわい）にあらず、将（しょう）の過（あやまち）なり。それ勢い均（ひと）しきとき、一をもって十を撃つを走（そう）という。卒（そつ）強くして吏（り）弱きを弛（し）という。吏（り）強くして卒（そつ）弱きを陥（かん）という。大吏（だいり）怒りて服さず、敵に遇（あ）えば懟（うら）みてみずから戦い、将（しょう）はその能（のう）を知らざるを崩（ほう）という。将（しょう）弱くして厳（げん）ならず、教道（きょうどう）も明かならずして、吏卒（りそつ）常なく、兵を陳（つら）ぬること縦横（じゅうおう）なるを乱（らん）という。将（しょう）、敵を料（はか）ることあたわず、小をもって衆に合（あ）い、弱をもって強（きょう）を撃ち、兵に選鋒（せんぽう）なきを北（ほく）という。およそこの六者（ろくしゃ）は敗（はい）の道なり。将（しょう）の至任（しにん）にして、察（さっ）せざるべからず。  
\*1  　\*2 　\*3 　\*4　 \*5 \*6 \*7  
■走\*1は説文に、「趨なり。夭止に従う。夭止は屈なり」、注に、「釋名に曰く、徐行を步と曰ふ。疾行を趨と曰ふ。疾趨を走と曰ふ」とある。夭は頭を傾けて手を振り走る形、止は足の形。趨は、大股で素早く進む儀礼での歩行でもある。それより早く手を振り走る、屈としており、走って逃げてゆく様でもある。勢いが等しい兵力で、一軍が十軍を攻撃すれば走（に）げることになる。■弛\*2は説文に、「弓解くなり。弓に従い也に従う」とあり、也は陀形で、弓の弦が解かれてくねくねとしている様であろう。注に、「弓、弦を解くなり」としている。張るべき弦が緩んでいること。卒は兵士、吏は上官、如何に強兵であれ、上官が怯弱ならば、緩んだ弦の強い矢のごとし。■陥は説文に、「高下なり、一に陊（おつ）と曰く。𠂤に従い臽\*3に従う」とあり、臽は坎（くぼみ）の中に人がはまっている形。𠂤は神が降りる梯子であり、聖所を暗示しており、臽を設けてその聖所を守ることが原義という。上官が蒙勇であるが、兵士が怯弱なら、深入りして抜けず陥落す。■崩\*4は説文に、「山壞（やぶ）るるなり。山に従い朋声」とある。高く積まれたものがバラバラにくずれて落ちるさま。大吏は大将に対する少将、副官の立場。副官や少将等が大将に対する憤怒を抱き、実戦に及べば大将の命に服さず、副官や少将等が勝手に動く。大将がそのことを知らないなら、全軍は総崩れとなろう。■料は説文に、「量るなり」とあり、注に、「其の輕重を稱して量と曰ふ。其の多少を稱して料と曰ふ。其の義一なり」とある。料敵とは敵軍の多少、強弱を見極め、判断を下すこと。■亂\*5の左辺は糸かせの上下に手を加えている形\*6で糸がもつれているさま、右辺は「へら」でもつれた糸をほぐすことで、治ることであるが、更にもつれ治まらないことでもあり、ここでは後者の義。大将が怯弱で軍律が厳しくなく、訓練が行き届かなく、上官と兵士の間の意思の疎通が悪く、それぞれが勝手に陣を営せば、命令は伝わらずもつれよう。■北\*7は説文に、「乖（そむ）くなり。二人相背くに従う」とあり、二人が互いに背を向けることから敗北、背走の義となる。大将が敵勢を把握せず、多勢に小勢、強兵に弱兵で当り、精鋭の先鋒もないなら、背走しよう。■六種の敗北への道、将軍が任に就くには、このことを察知しておかねばならないと釈されるが、将軍を任命するには、その将をよく考察すべきことを云うのであろう。  
  
、、、、、、、、、、、、、、、、、、　それ地形は兵の助けなり。敵を料（はか）りて勝ちを制（せい）し、険阨（けんあい）・遠近を計（はか）るは、上将（じょうしょう）の道なり。これを知りて戦いを用（もち）うる者は必ず勝ち、これを知らずして戦いを用（もち）うる者は必ず敗（やぶれ）る。ゆえに戦道（せんどう）必ず勝たば、主（しゅ）は戦うなかれというとも、必ず戦いて可（か）なり。戦道（せんどう）勝たずんば、主（しゅ）は必ず戦えというとも、戦うなくして可（か）なり。ゆえに進んで名を求めず、退（しり）ぞいて罪を避（さ）けず、ただ人をこれ保ちて利の主（しゅ）に合うは、国の宝（たから）なり。  
■助は且と力からなり、且は草を切る鉏の形、力は田を耕す耒の形、除草に力を貸すことが原義。説文では左、あるいは佐とし、輔佐の義とする。地形が兵を駆除するに力を貸す。■計は言と十からなるが、卜を十としたものと考えられており、多くの卜占の記録を稽（かむが）え計画を策定することが原義とされよう（字統）。■険阨は、けわしくふさがる義であるが、計篇の「遠近険易」に従い、遠近と対をなす険易・険夷とするテキストもある。阨はàiで隘に通じ狭いこと、èで厄に通じ災難なこと。地形の険阨、敵と自軍の到達時間を考慮して計画を策定する。■上将は、将軍達の中で作戦に優れ全体を統率する将軍。■戦道は、戦の道理と注されることが多い。ここでは、以下の知彼知己、知天知地に相当しよう。廟算は出陣前、君主が主宰して行う。戦道は、戦場に於て、廟算で選ばれた上将が行う算、その結果、互角、有利、不利と様々な想定がなされよう。必勝の算であれば、主命に反す汚名を恐れず、戦え。不勝の算であれば、主命に反す罪を恐れず、退け。人を保ち、利が主に合うことを前提にしている。君主や上将（軍師）の置かれた立場には、社会システムの歴史的制約があり、また、註釈家の生きる世の現実により、解釈に相違がでる。孫子は、周王朝の権威が貫徹しなくなった春秋時代の主と上将の関係を前提にしている。世襲の封建君主と軍事に秀でた大夫の関係となる。周の武帝、秦の始皇帝、漢の武帝などの時代には成立し難い。古代共和制のローマにおいては、危急の戦時に元老院がディクタトール（独裁官）とその輔佐のマギステル・エクィトゥム（騎兵長官）を任命し、全権を委任し、独裁官が主力の歩兵軍団を騎兵長官が騎兵軍団を指揮した。また、近代以降には、戦時において、大統領が軍事最高司令官となるなど、いわゆるシビリアン・コントロールのシステムがある。また、天皇の統帥権を干犯して満州での戦線を拡大した関東軍というもあった。■人を民とするテキスト、合の無いテキストがある。唐の李世民の民を避けて人と改字したものとされる。この人は、ここでは兵士であり、兵士の命を大事にすることが、君主の利と合致することを想定していよう。  
  
、、、、、、、、、　卒（そつ）を視（み）ること嬰児（えいじ）のごとし、ゆえにこれと深谿（しんけい）に赴（おもむ）くべし。卒（そつ）を視（み）ること愛子（あいし）のごとし、ゆえにこれとともに死すべし。厚（あつ）くして使うことあたわず、愛して令（れい）することあたわず、乱（みだ）れて治むることあたわざれば、譬（たと）えば驕子（きょうし）のごとく、用（もち）うべからざるなり。  
■嬰は賏と女からなり、賏は貝を綴った首飾り、新生の女子に加えることから嬰児という。誕生したばかりの女の赤児を視る気持ち。■谿は説文に、「山瀆（とく）の通ず所なきもの。谷に従い奚聲」とあり、瀆は溝のことでもあり、舟行し難い所、又は、小さな流れが集まる所。深谿は深山幽谷。■愛\*1は説文に、「行く皃（かたち）。夊に従い㤅聲」とあり、夊は足を引いてゆくさま、㤅を惠としており、恵みを加えて行くと解釈しているが、金文\*2では、後ろを顧みて立つ人の姿と心からなり、後ろに心を残しながら立ち去ろうとする人の姿とみられる（字統）。■厚\*3は厂と㫗からなり、金文では、廟で鬯酒を奉じる象、享饌することで祖先をもてなすこと。■兵を大切にすべきであるが、もてなして使う事が出来ず、いとしくて命じることができず、乱れても正すことが出来ないなら、駄駄っ子のようなもので、役に立たない。  
\*1 \*2 \*3  
  
、、、、、、、、、、、、、、、、、、　わが卒（そつ）のもって撃つべきを知るも、敵の撃つべからざるを知らざるは、勝（しょう）の半なかばなり。敵の撃つべきを知るも、わが卒（そつ）のもって撃つべからざるを知らざるは、勝（しょう）の半なかばなり。敵の撃つべきを知り、わが卒（そつ）のもって撃つべきを知るも、地形（ちけい）のもって戦うべからざるを知らざるは、勝（しょう）の半（なか）ばなり。ゆえに兵を知る者は、動いて迷わず、挙(あ)げて窮（きゅう）せず。ゆえに曰く、彼(かれ)を知り己(おのれ)を知れば、勝（しょう）、すなわち殆（あや）うからず。天を知り地を知れば、勝（しょう）、すなわち窮（きわ）まらず。  
■半\*1は八と牛からなり、牛を両分すること、半分、五分五分、勝敗は不明となる。■自軍に攻撃能力があっても、敵軍を攻撃すべきでないことがあることを知らねば、勝負は五分五分。■敵軍を攻撃する好機であっても、自軍の攻撃能力が十分でないことを知らねば、勝負は五分五分。■攻めきれない地形と知らねば、勝負は五分五分。■迷\*2は、金文では辶と米からなるが、この米は十字路と足の組み合わせ、あるいは四方八方の路ともみられ、甲骨文\*3ではどちらに向かって行けばよいか分からない様。不迷とは攻めるべき所、攻めるべきでない所が分かっていること。■窮\*4は穴と躬からなり旧字の竆は穴と躳からなり、躬も躳も身体が屈曲している様、穴の中で身動きがとれない様。不窮は伸び伸びとしている様。挙兵して追い詰められることがないのであるが、知彼知己、知天知地ともなれば戦わずして勝つ、兵の損耗がない。■殆\*5は歹と台からなり、歹は残骨、台は、耜を浄める儀礼が原義で、始や胎に用ゐられ、近いこと、兆しがあることで、以に通じ、殆は以て歹ず、死に近い、死の兆しがある、見通しが暗いこと。  
\*1 \*2\*3\*4\*5  
  
**宋刊十一家註孫子**（[HP](http://www.cos.url.tw/sunzi/10man.htm)）（注釈者のプロフィールについては、古典ぱん（[HP](https://k10p.net/?p=1253)）に詳しい）  
  
〈地形〉篇  
  
曹操曰く、戰を欲さば、地形を審（つまび）らかにし以て勝を立て。  
李筌曰く、軍出でて後に、必ず地形に變動有り。  
王晳曰く、地に利は當に周（あまね）く險、隘、支、挂の形を知るべし。  
張預曰く、凡そ軍が行く所有らば、先ず五十里內の山川形勢、軍士をして其の伏兵を伺わしめ、將は乃ち自ら行きて地勢を視、因りて之を圖り、其の險易を知れ。故に、行きて師が境を越えなば、地形を審かにして勝を立つ。故に〈行軍に〉次ぐ。  
  
（孫子曰：地形：有通者，）  
梅堯臣曰く、道路が交達す（相互に達する）。  
  
（有挂者，）  
梅堯臣曰く、網羅の地、往けば必ず掛綴さる（被され閉じ込められる）。  
  
（有支者，）  
梅堯臣曰く、相持之地（雙方が對立し、互に相い讓ることも妥協もしない地）。  
  
（有隘者，）  
梅堯臣曰く、兩山の谷の間に通ず。  
  
（有險者，）  
梅堯臣曰く、山川丘陵なり。  
  
（有遠者。）  
曹操曰く、此の六つは、地の形なり。  
梅堯臣曰く、平陸なり。  
杜佑曰く、此の六地の名、民に教えて之に居りて、便利を得れば則ち勝つなり。  
張預曰く、地形に此の六者の別有り。  
  
（我可以往，彼可以來，曰通；）  
杜佑曰く、謂うは、俱に平陸に在れば、往來は通じ利なり。  
張預曰く、俱に平陸に在れば、往來は通達す。  
  
（通形者，先居高陽，利糧道，以戰則利。）  
曹操曰く、寧ろ人に致し、人に致されること無かれ。  
李筌曰く、之に先じ以て敵を待て。  
杜牧曰く、通とは、四戰の地。須べからく先に高陽の處に據り、敵人をして先に得さしむこと勿れ。而るに我後に至るなり。利糧道とは、津阨（狭い船着き場）或いは敵人の要衝每に、則ち壘を築き或いは甬道（塁と塁の間の通路）を作り以て之（糧道）を護る。  
賈林曰く、通る形とは、崗坂の有ること無く、亦要害無し、故に兩通し往來す。高に處れば望候に易く、陽に向うは視生（顔が太陽に向くこと）。糧道通じば、轉運に便易（好都合／便利）にして、此に戰に於て利すなり。  
杜佑曰く、寧致人，無致於人とは、己に先に高地に據り、分けて屯して歸來の路を守り、敵をして己が糧道を絕たしむこと無かれ。  
梅堯臣曰く、先に高陽（高く見通しの良い所）に據りて、糧を阨（困難な所）を通ずに利す。敵人來り至らば、我戰いて則ち利あり。  
王晳が註は曹操に同じ。  
何氏は杜佑が註に同じ。  
張預曰く、先に戰地の處りて以て敵を待てば、則ち人に致して人に致されず。我は高に居り陽に面せば、坐すと雖も以て敵に致す。亦、敵人が戰に不來赴（戦を仕掛けないこと）を慮る、故に、須べからく糧餉を絕やせしめず。然る後に利とす。  
  
（可以往，難以返，曰挂；）  
杜佑曰く、掛とは、牽掛なり（懸念/放心/どうして良いか分からなくなる）。  
  
（挂形者，敵無備，出而勝之；敵若有備，出而不勝，難以返，不利。）  
李筌曰く、往きて宜しく返るべからざるを挂と曰う。  
杜牧曰く、挂とは、險阻の地に、敵と共に有り、犬牙相錯，動有挂礙也（相互に交錯し、牽制し合うこと）。往きて敵を攻め、敵に若し備え無くば、之を攻めれば必ず勝つ。則ち險阻がために相錯すと雖も、敵人已に敗れており、復（また）我が歸路を邀（さえぎ）ることを得ず。若し往きて敵人を攻め、敵人に備え有れば、之に勝つこと能ず。則ち敵人の守ること險阻の為に、我が歸路を邀り、以て返ること難し。  
陳皥曰く、やむを得ず陷りて此に在り、則ち須べからく持久の計を為すべきも、敵人の糧を掠取し、以て利便を伺いて之を擊て。  
杜佑曰く、敵に備無くば、出でて之を攻めれば、勝る可し。備え有れば、之に勝つを得ず、則ち還返すること難し。  
梅堯臣曰く、其の不意に出でば、往けば則ち利を獲る。若し其れ備え有れば、往けば必ず制を受く。  
張預曰く、敵情を察知し、果して備え無きと為（せ）ば、一舉にして之に勝つこと、則ち可なり。若し其れ備え有れば、出でて克たず。戰むと欲（し）て則ち留る可からず、歸らむと欲て則ち返るを得ず、利とする所にず（留まって戦うことも引き返す事も出来ない）。  
  
（我出而不利，彼出而不利，曰支；）  
杜佑曰く、支は久なり。俱（とも）に不便にして久しく相持すなり。  
張預曰く、各（おのおの）守ること險固にして、以て相支持す。  
  
（支形者，敵雖利我，我無出也；引而去之，令敵半出而擊之，利。）  
李筌曰く、支は、兩俱に不利にして、挂の形の如し、故に各其の勢を分つ。  
杜牧曰く、支は、我と敵人と各守ること高險にして、壘して對軍し、中に平地有るも、狹くして且つ長く、軍を出して則ち陳を成すこと能わず、敵に遇いて則ち自下（しも）より上（かみ）を禦（ふせ）ぎ、彼我の勢俱に利便せず。此の如きは、則ち堂堂にして引き去り、卒を伏せて之を待つ。敵が若し我を躡（お）うならば、其の半ば出だすを候（うかが）い、兵を發して之を擊てば則ち利なり。若し敵人が先に去り以て我を誘えば、我は出ず可からず。  
陳皥曰く、此の說は理が繁し（複雑）で語倒す。但に彼此軍を出し、地形は不便。敵が若し利を設け我を誘いて去らば、我は慎しみて之を追うこと勿かれ。我が若し引きて去れば、敵は止り則ち已む。若し來りて我を襲うならば、其の半ば出ずを候い、則ち之を急擊せよ。  
賈林曰く、支は、險隘を隔て以て相要截（途中で迎撃）す可くも、得て相支持（膠着）すに足る、故に先に出ずは不利なり。  
杜佑曰く、利は利我なり。我に佯背して（偽りて背を向け）去らば、我は出でて逐うこと無かれ。其れ引くを待ちて之を擊てば、敗らる可し。  
梅堯臣曰く、各が居る所險にして、先に出でなば必ず敗らる。利して我を誘うは、我は愛す可からず。僞りて去り敵を引き、半ば出でなば擊て。  
王晳曰く、敵が至らむとせずんば、則ち奇伏設けて退け。且つ之を詭きて、必ず出でしめむ。  
張預曰く、我を利すとは、我に佯背して去るを謂う。出でて攻む可からず。我が險を捨て則ち反りて乘ず所と為し、當に自ら引きて去れ。敵が若し來りて追わば、其れ半ば出ずを伺いて、行列未だ定まらずして、銳卒で之を攻めば、必ず利を獲む。『李靖兵法』に曰く、「彼此不利の地では、引きて佯りて去り、其の半ば出ずを待ちて之を邀擊（迎撃）せよ」と。  
  
（隘形者，我先居之，必盈之以待敵；）  
杜佑曰く、盈は滿なり。兵陳、滿隘の形を以て、敵に進退を得さしめむと欲（す）。  
  
（若敵先居之，盈而勿從，不盈而從之。）  
曹操曰く、隘形とは、兩山間の通谷なり。敵勢が我を撓（みだ）すことを得ず、我が先に之に居らば、必ず前に隘口に齊（そろ）えて、陳して之を守り、以て奇を出す。敵が若し先に此地に居り、口に齊えて陳しているならば、從う勿れ。即ち半隘に陳せば之に從いて、敵と此の利を共にせよ。  
李筌曰く、盈は平なり。敵が先に隘を守らば、我は之を去る。趙が井陘の口を守らず、韓信は之を下る。陳豨（ちんき）が漳水（しょうすい）を守らず、高祖は之を下るは、是なり。  
杜牧曰く、盈は滿なり。言うは、兩山の間に遇い、中に通谷有り、則ち須べからく當に山口に營を為し、兩山の口と齊え、水が器に在るが如くして盈滿（充足）すなり。  
杜佑曰く、齊口、亦滿を謂う。水が器を滿たすが如し、口と齊えるなり。若し、我が之に居り、平易、險阻、皆て制すこと我に在れば、然る後に奇に出でて以て敵を制す。若し敵人が隘の半ばに據りて、齊口滿盈の道を知らずんば、我は則ち隘に入りて以て之に從う。蓋し、敵も亦隘に在り、我も亦隘に在り。俱に地形を得れば、勝敗は我に在り、地形に在らず。夫れ齊口盈滿の術は、惟れ隘形は獨り有口を解すに非ずして、譬えば平坡（なだらかな傾斜地）迥澤（はるか彼方の沢）の如く、車馬が通らず、舟楫（船の運行）に勝（た）えず、中に一逕（小道）有り、亦須べからく其の路口に據るべきは、敵をして得て進ましめず。諸を知る可し。  
陳皥曰く、隘口とは、陳是を言う、營に非ざるを言う。  
賈林曰く、從は逐なり。盈は實なり。敵が若し實にして之を滿たさば、則ち逐いて討つ可からず。若し虛にして備え無くば、則ち入りて之を討て。  
梅堯臣は杜牧が註に同じ。  
王晳は曹操が註に同じ。  
張預曰く、左右に高山、中に平谷有りて、我が先に之に至らば、必ず山口に齊えて滿たし以て陳を為し、使敵をして得て進めしめず。我は以て奇兵を出す可く、彼は以て我を撓すこと能わず。敵が若し先に此の地に居り、隘口を盈たし塞ぎて陳せば、從う可からず。若し隘口を守ると雖も、俱に齊えて滿たさずんば、入りて之に從いて、敵と此の險阻の利を共にせよ。吳起が曰く、「天竈（てんそう）に當ること無かれ」。「天竈とは、大谷の口」。言うは、隘口に迎えて之に居らしむ可からず（敵を入れるな）。  
  
（險形者，我先居之，必居高陽以待敵；）  
杜佑曰く、高陽の地に居り、以て敵人を待つ。敵人が其の下の陰に從いて來らば、之を擊てば則ち勝つ。  
  
（若敵先居之，引而去之，勿從也。）  
曹操曰く、地形が險隘ならば、尤なるは、人に致される可からず。  
李筌曰く、險阻の地の若きは、人に落後さる可からず。  
杜牧曰く、險は山峻しく谷深く、人力の能く作為す所に非ず。必ず高陽に居りて以て敵を待て。若し敵人が先に之に據れば、必ず以て爭う可からず。則ち當に引きて去るべし。陽は、南面の地、敵人を恐れ持久し、我が陰に居れば生は疾（や）む。今若し崤（山）澠（池）に敵に遇わば、則ち先に北山に據る、此れ乃ち是れ陰に面して陽を背にすなり。高、陽の二つは、止むに陽を捨て高に就く可し、高を捨て陽に就く可からず。孫子乃ち統べて之を言うなり。  
杜佑曰く、地が險にして先に據らば、則ち人に致されず。  
梅堯臣曰く、先に險固を得、高に居りて陽に就き、敵を待てば則ち強し。敵が苟くも之に先じ、戰に就けば則ち殆し、引きて去ること疑う勿れ。  
王晳曰く、此れ亦地を爭う。唐の太宗が先じて武牢に據るが若きは、以て竇建德を待つ、是なり。  
張預曰く、平陸の地、尚、先に據るべし、況や險阨の所をや。豈に以て人に致さる可きや？故に先に高陽に處りて、以て（自からは）佚して（敵の）勞を待てば、則ち勝たむ。若し敵が已に此の地に據らば、速（すみやか）に引退し、與に戰う可からず。裴行儉が突厥を討つに、嘗て晚下の營に際して、壍壘を方に周らせ、忽に令して移りて崇岡に就く。將士は悅ばず、以て眾を勞す可からずと謂う。行儉は從わず、速に令して之に徙（うつ）らしむ。是の夜、風雨が暴して至り、前に設營したる所は、水深丈に餘る。將吏驚きて服す。此を以て之を觀るに、高陽に居りて惟れ戰便ならずも、亦、水澇の患無きなり。  
  
（遠形者，勢均，難以挑戰，戰而不利。）  
曹操曰く、挑戰とは、敵に延すなり。  
李筌曰く、力敵（かな）いて挑まば、則ち利未だ知る可からず。  
杜牧曰く、譬えば我と敵と壘すこと相去ること三十里の如き。若し我が來りて敵の壘に就き、而して敵に延して戰を欲（せ）ば、是れ我は困し敵は銳、故に戰うは不利。若し敵が來りて我が壘に就き、我に延して戰を欲ば、是れ我は佚にして敵は勞し、敵は亦不利。故に勢均しきを言う。然らば則ち如何？曰く、必ず戰は欲（む）とせば（戦わねばならないのなら）、則ち移りて相近づくべし。  
陳皥曰く、夫れ敵と營壘すこと相遠く、兵力又均しく、以て戰を挑むこと難ければ、戰わば則ち不利。故に下文に云く、「勢均しくば、一を以て十を擊て、走（にぐ）を曰う」是なり。夫れ戰を挑むは、先に須べからく我が兵眾の強弱を料り、可なれば以て敵に加え則ち之を為せ。然らずんば、則ち輕進す可からず。自ら敗を取らむ（敗北する）。  
孟氏曰く、兵の勢既に均しく、我が遠く入りて挑むは、則ち不利なり。  
杜佑曰く、挑は敵を迎うなり。遠形とは、國を去ること遠きなり。地勢が均等にして、獨り便利無くして、先に挑む戰は、不利なり。  
梅堯臣曰く、勢が既に均一にして、戰を挑むは則ち勞す、敵に致して則ち佚（我は労、敵は楽）。  
王晳曰く、遠を以て我に致さば、勞すなり。  
張預曰く、營壘すこと相遠く、勢力又均しくば、止まり坐して以て敵に致す可し、人に挑みて戰を求むべからず。  
  
（凡此六者，地之道也；將之至任，不可不察也。）  
李筌曰く、此は地形の勢なり。將が知らずんば、以れ敗らる。  
賈林曰く、天が生ず地形、以て目察す可し。  
梅堯臣曰く、夫れ地形は、兵を助け勝つ本を立つ。豈に得て度らずや？  
張預曰く、六地の形、將が知らざる可からず。  
  
（故兵：有走者，有弛者，有陷者，有崩者，有亂者，有北者。凡此六者，非天之災，將之過也。）  
賈林曰く、走、弛、陷、崩、亂、北は、皆て敗壞の大小變易の名なり。  
張預曰く、凡そ此の六敗は、咎が人事に在り。  
  
（夫勢均，以一擊十，曰走；）  
曹操曰く、力を料らず。  
李筌曰く、力を量らざる。若し、形便の地を得て、奇伏の計用いば、則ち可ならむ。  
杜牧曰く、夫れ一を以て十を擊つ道は、先に須べからく敵人と我が將の智謀、兵の勇怯、天時と地利、飢飽と勞佚、十倍にして相懸して（同時に攻めるかかる）、然る後に以て一を奮して十を擊つ可し。若し勢均しく敵と力して、自ら料ること能わずして、我の一を以て敵の十を擊てば、則ち須べからく奔走し、舍に返りて復び駐止を為すこと能わざらむ。  
梅堯臣曰く、勢が均しいと雖も兵甚しく寡くば、寡を以て眾を擊つは、必ず走（に）ぐる道なり。  
王晳曰く、鬬を待たずして走るなり。  
張預曰く、勢が均しく、將の智勇、兵の利鈍を謂えば、一切相敵す。夫れ敵に體して勢い等しくば、自ら不輕戰す可からず。況や寡を奮して以て眾を擊たば、能く走ぐこと無からむや（走ぐ）？  
  
（卒強吏弱，曰弛；）  
曹操曰く、吏が能く統（御）せず、故に弛（たる）みて壞（滅）す。  
杜牧曰く、言うは、卒伍は豪強、將帥は懦弱にして、能く驅率（駆使統率）せず。故に、弛みて坼壞（裂壞）し散ず。國家長慶の初に、田布に帥魏を命じ以て王延凑をたしむ。布は長じて魏に在り、魏人は之を輕易す。數萬人皆て驢（ロバ）に乘りて行營し、布は禁ずこと能わず。居ること數月にして、合戰を欲せば、兵士は潰散す。布は自剄し身死す（自ら首を斬って死ぬ）。  
賈林曰く、之を令して從わず、之を威して服さず、敵に見え則ち亂る。壞さずして何と為す？  
梅堯臣曰く、吏に統率者無くば、則ち軍政は弛みて壞す。  
王晳は曹操が註に同じ。  
何氏曰く、言うは、卒伍は豪強にして、將帥は懦弱、驅領すこと能わず、故に弛みて坼壞し散ず。  
張預曰く、士卒は豪悍、將吏は懦弱、約束を統轄すること能わず。故に軍政は弛みて壞す。吳楚は相い攻めて、吳公の子光が曰く、「楚軍は多く寵るも、政令は一ならず。帥は賤にして能く整わず、大威命無し。楚は敗らる可し」と。果して大いに楚師を敗る。  
  
（吏強卒弱，曰陷；）  
曹操曰く、吏は強欲に進めど、卒が弱く輒（たやす）く陷（落）せば、敗れる。  
李筌曰く、陷は敗なり。卒が弱く一ならずんば、則ち以て戰を為すに難し、是を以て陷に強（しい）らる。  
杜牧曰く、言うは、攻取を為さむと欲（し）、士卒が怯弱。其の力を量らず、強いて之を進めば、則ち死地に陷沒すなり。  
陳皥曰く、夫れ人は皆、血氣有り。誰が敵と鬬う心無からむ？將が刑德に乏しく、士が訓練に乏しきが若くば、則ち人は皆懦怯、用う可からず。  
賈林曰く、士卒は皆て羸し（疲れて弱っている）、之を鼓（舞）せど進まず。吏が強て獨り戰わば、徒は其の身を陷（落）す。  
梅堯臣曰く、吏は強進すと雖も、之を勇を以て激すこと能わず、故に死に陷る。  
王晳曰く、下に為す所の陷。  
張預曰く、將吏が剛勇にして戰わむと欲（す）、而れども士卒は訓練に素乏にして、勇を齊（一）にし同じく奮（戦）すこと能わずば、苟も之を用いば、必ず亡敗に陷る。  
  
（大吏怒而不服，遇敵懟而自戰，將不知其能，曰崩；）  
曹操曰く、大吏は小將なり。大將が之を怒り、心壓服せずして、忿して敵に赴き、輕重を量らずんば、則ち必ず崩壞す。  
李筌曰く、將の敵の為に怒る所となし、強弱を料らず、士卒を驅して命ずが如きは、必ず崩壞す。  
杜牧曰く、春秋の時、楚子が鄭を伐ち、晉師が之を救う。伍參が楚子に言いて曰く、「晉の政に從うは新し、未だ能く令行われず。其の（輔）佐の先縠（せんこく）は剛愎にして（私見に固執する）不仁、未だ用命に肯（がえん）ぜず（命令にに納得しない）。其の三帥は、專行（独断独行）して（衆心を）獲ず、聽くに上（かみ）無く、眾は適從無し（誰に従うべきか分からない）。此の行なり。晉師は必ず敗れむ」と。晉の魏錡（ぎき）は公族を求め未だ得ずして怒り、晉師を敗れせしめんと欲（し）、師を致すを請うも、許されず。使を請えば、之を許され、遂に往きて戰を請いて還る。趙旃（ちょうせん）も卿を求めて未だ得ず、戰を挑むを請うも、許されず。盟を召せば之を許され、魏錡と皆（とも）に命ぜられて往く。郤克（げきこく）曰く、「二憾が往けり、備え弗（せ）ずんば、必ず敗れん」と。隨會が曰く、「若し二子が楚を怒らせ、楚人が我に乘ずば、師を喪い日無からん！之に備うに如かず」と。先縠が曰く、「不可」と。隨會は鞏朔（きょうさく）、韓穿（かんせん）をして師を敖の前に七覆せしむ。故に上軍は敗られず、而して中軍、下軍は果して敗れる。七覆とは七か處の伏兵なり。敖は山の名なり。  
陳皥曰く、此の大將は理無くして小將を怒り、之をして心の內に不服を懷かしむ。怨怒に因緣（原因）し、敵に遇い戰に便すも（習熟しているが）、能否（出来ることと出来ないこと）を顧みず、大敗す所以なり。  
賈林曰く、上により下を墮すを崩と曰う。大吏小將が相い壓伏せざるは、崩壞の道。將が又、己の能否を量らず、卒の勇怯を知らず、敵と鬬うを強いなば、自ら賊害を取る。豈に上より崩れるに非ざるか？  
梅堯臣曰く、小將が心怒りて服さず、敵に遇いて怨懟（怨恨）して顧みず、自から崩敗を取るは、蓋し將が其の能を知らざる。  
王晳曰く、謂うは、將が怒るに理を以てせず、且つ裨佐の才を知らずして、激しく其の凶懟（災いとなる怨み）に致らば、山の崩壞するが如し。  
何氏曰く、三軍が力を同じくし、上下が心を一つにせば、則ち勝つ。  
張預曰く、大凡（おおよそ）百將が心を一にし、三軍が力を同じうせば、則ち能く敵に勝つ。今、小將が恚怒（憤怒）して大將の令に服さず、意欲せば俱に敗れる。敵に逢い戰に便すも、能否を量らず、故に必ず崩れ覆（くつが）える。晉が秦を伐ち、荀偃の行令は是なり。曰く、「雞が鳴けば駕せ（馬を繋ぎ）、唯に餘の馬首、是を瞻（み）よ」と。欒書が怒りて曰く、「晉國の命、未だ是れ有らず！」と。遂棄の歸。又、趙穿が臾駢を惡みて秦に逐う、魏錡が晉師に怒りて楚に乘ず。  
  
（將弱不嚴，教道不明，吏卒無常，陳兵縱橫，曰亂；）  
曹操曰く、將が此の若く為すは、亂の道なり。  
李筌曰く、將に或は此に一つも有らば、亂の道なり。  
杜牧曰く、言うは、吏卒皆てが常度（正常な方法）に拘（足）されず。故に兵を引きて出陳し、或は縱し或は橫（好き勝手に）し、皆て、自（おのづ）から之を亂すなり。  
賈林曰く、威令は既に嚴明ならず、士卒に則ち常の禀（上意下達下意上達）無し。此の如き軍幕、亂れずして何と為す？謂うは、將に嚴令無く、賞罰が行われざる故（理由）。  
梅堯臣曰く、懦にして嚴ならずば、則ち士に常檢（通常の決まり事）無し。教えて明ならずんば、則ち出陳して縱橫。不整、亂の道なり。  
王晳曰く、亂せば勝たず、其れ敗れる。  
張預曰く、將弱くして嚴ならずとは、將帥に威德無きを謂う。道を教えて明ならずとは、教閱（訓練）して古法無きを謂う。吏卒に常無しとは、將臣に久任（旧任）無きを謂う。陳兵縱橫とは、士卒に節制無きを謂う。將が此の若きを為せば、自ら亂の道。  
  
（將不能料敵，以少合眾，以弱擊強，兵無選鋒，曰北。）  
曹操曰く、其の勢此の若きは、必ず走（に）ぐる兵なり。  
李筌曰く、軍が敗れるを北と曰う、敵を料らざるなり。  
杜牧曰く、衛公『李靖兵法』に「戰鋒隊」有り。言うは揀擇敢勇の士（選りすぐった勇敢な兵士）が戰（いくさ）每（ごと）に皆て先鋒を為す。『司馬法』に曰く、「良を選びて兵に次せば（良兵を選別して編成する）、人の強に益す」と。註に曰く、「勇猛、勁捷（強く素速い）は、戰いて功を得ず。後戰に必ず前に選べば、當に以て其の銳氣を激致すなり」と。東晉の大將軍の謝玄は、北に廣陵を鎮す時に、苻堅が強盛であり、玄は多く勇勁を募れり。劉牢之、何謙、諸葛侃、高衡、劉軌、田洛、孫無終等は驍猛（勇敢威武）を以て應募す。玄は以牢之が領す精銳を前鋒と為し、百戰して百勝し、號（な）づけて「北府兵」と為す。敵人は之を畏れ、向う所、必ず克てり。  
賈林曰く、兵鋒に利鈍を選ばず、士卒が勇怯を知らず。此の如き用兵は、自ら背道を取る（道に背く）。  
梅堯臣曰く、敵情を量ること能ず、少を以て眾に當る。精銳を選ぶこと能わず、弱を以て強を擊つ。皆て奔北（逃走敗北）の理なり。  
何氏曰く、夫れ士卒は勇に疲れ、混同して一と為す可からず。一にして則ち勇士は勸めず、兵が疲れて容る所有るに因りて、出でて戰わずんば、自ら敗れる。故に、『兵法』に曰く、「兵に選鋒無きを、北と曰ふ」と。昔齊は伎擊を以て強く、魏は武卒を以て奮し、秦は銳士を以て勝ち、漢は三河に俠士、劍客、奇材を有せり。吳は之を解煩（かいはん）と謂い、齊は之を決命（けつめい）と謂い、唐は之を跳盪（ちょうとう）と謂う。是れ皆て選鋒の別名なり。兵の勝つ術は、此より先は無し。凡そ軍眾が既に具われば、則ち大將は諸營を勒（統率）し、各（おのおの）精銳の士を選び、須べからく趫健（敏捷強健）が眾に出で、武藝が軼格（別格）なるは、部して別隊と為す。大約、十人に一人を選び、萬人に千人を選ぶ。所を選び務を寡とし、要に在りて必ず當る。腹心を擇び健將（猛者）が統率す。大將より、親兵、前鋒、奇伏の類は皆て品量（品評）してこれを配せ。  
張預曰く、設若（もし）寡を奮して以て眾を擊ち、弱を驅して以て強に敵し、又、驍勇の士を選ばずして、使先鋒を為さしめば、兵は必ずや敗北す。凡そ戰いには、必ず精銳を用い前鋒と為すは、一に則ち吾が志を壯し、一に則ち敵威を挫くなり。故に、尉繚子が曰く、「武（たけ）き士を選ばずんば、則ち眾は強からず」と。曹公は張遼を以て先鋒と為し鮮卑を敗る。謝玄は劉牢之を以て精銳を領せしめ苻堅を拒むは、是なり。  
  
（凡此六者，敗之道也；）  
陳皥曰く、一に曰く、寡眾を量らず。二に曰く、本より刑德に乏し。三に曰く、訓練に失す。四に曰く、理非らず怒を興す。五に曰く、法令不行われず。六に曰く、驍果（猛勇剛毅）を擇ばざる。此を六敗と名づく。  
  
（將之至任，不可不察也。）  
張預曰く、已上の六事は、必敗の道。  
  
  
（夫地形者，兵之助也。）  
杜牧曰く、夫れ兵の主は、仁義節制に在るのみ。若し地形を得れば、以て兵の助と為す可し、勝を取る所以なり。「助」を一（ある）は「易」と作（な）す。  
陳皥曰く、天の時は、地の利に如かず。  
孟氏曰く、地の利は人を待つこと而して險し。  
賈林曰く、戰は兵に在ると雖も、地を得れば勝ち易し。故に曰く、「兵の易なり」と。山を障とす可し、水を灌とす（注ぎ込む）可し、高は卑に勝ち、險は平に勝つ。  
王晳曰く、兵の道は則ち人に在り。  
張預曰く、地の形を審（つばひらか）にすは、兵の助のみ、乃ち末なり。敵を料り勝を制すは、兵の本なり。  
  
（料敵制勝，計險阨、遠近，上將之道也。）  
杜牧曰く、饋用の費、人馬の力、攻守の便、皆ては、險阨遠近に在り。言うは、若し能く此を料り以て敵を制すならば、乃ち將の臻極（至極）の道と為す。  
王晳曰く、敵の窮極の情、險阨遠近の利害を料る。此れ兵道なり。  
何氏曰く、敵を知り、地を知るは、將軍の職。  
張預曰く、既に能く敵の虛實強弱の情を料り、又、能く地の險阨遠近の形を度り、本末の皆を知れば、將の道の畢と為らむ（尽くすことになる）。  
  
（知此而用戰者，必勝；不知此而用戰者，必敗。）  
杜牧曰く、險阨、遠近を知ることを謂う。  
梅堯臣曰く、將は地形を知り、又、軍政を知れば、則ち勝つ。知らずんば則ち敗れる。  
張預曰く、既に敵情を知り、又、地の利を知り、以て戰えば則ち勝つ。俱に之を知らずんば、以て戰えば即ち敗れる。  
  
（故戰道必勝，主曰無戰，必戰可也；戰道不勝，主曰必戰，無戰可也。）  
李筌曰く、戰勝の道を得れば、必ず戰う可し。戰勝の道を失えば、必ず戰うこと無かる可し。主を立つ人は、其の行を發（おこ）す。  
杜牧曰く、主は君なり。黃石公曰く、「軍を出し師を行するに、將は自ら專にすに在り。進退內に御せば（軍の進退を国内から統制すれば）、則ち功は成り難し。故に聖主明王は、跪して推轂して（将軍職に就任させて）曰く、閫外（都の外；戦場）の事、將軍が之を裁す」と。  
孟氏曰く、君に違うとも、士眾に逆わず。  
梅堯臣曰く、將は軍に在れば、君命在りて受けざること有り。  
張預曰く、苟しくも必勝の道有れば、君が不戰を命ずと雖も、必ず戰う可し。苟しくも必戰の道無くば、君が必戰を命ずと雖も、戰う可からず。與に其れ令に從いて敗れる事、制に違いて成功するに若かず。故に曰く、「軍中では天子の詔を聞かず」と。  
  
（故進不求名，退不避罪，）  
王晳曰く、皆て忠は以て國の為にす。  
何氏曰く、進みて豈に名を求めむや？國家に利を見て、士民は則ち進むなり。退きて豈に罪を避けるや？其れ蹙國（国土を喪失する）殘民（人民を損う）の害を見れば、君が命じて進ましむと雖も進まず。罪が其の身に及びて悔いず。  
  
（唯人是保，而利合於主，國之寶也。）  
李筌曰く、進退は皆て人を保ちて、身を為すに非ず。  
杜牧曰く、進みて戰勝の名を求めず。退きて違命の罪を避けず。此の如き將は、國家の珍寶、其れ得ること少きを言る。  
陳皥曰く、合は猶歸なり。  
梅堯臣曰く、寧ろ命に違いて勝を取り、命に順（したが）いて敗れるに致ること勿れ。  
王晳曰く、戰うと戰わずは、皆て民を保ち主を利すに在るのみ。  
張預曰く、進退が命に違うは、己の為に非ず。皆て民を保ち命じて主利に合う所以、此れ忠臣にして國家の寶なり。  
  
（視卒如嬰兒，故可與之赴深谿；視卒如愛子，故可與之俱死。）  
李筌曰く、若し、之を撫すこと此の如くば、其の死力を得る。故に楚子が一言す、三軍の士皆て挾纊の（暖かい綿衣にくるまれている）如し。  
杜牧曰く、戰國時に、吳起が將と為り、士卒の最下者と同じく衣食す。臥すに席を設けず、行くに騎乘せず、親ら糧を裹贏（つつみにな）い、士卒と勞苦を分かつ。卒に疽（はれもの）を病むこと有れば、吳起は之を吮（す）う。其の卒の母は聞きて之を哭す。或（あるひと）問いて曰く、「子は卒也なり。而るに將軍が自ら疽を吮うを、何すれぞ哭すや？」と。母が曰く、「往年、吳公が其の父を吮い、其の父は踵を旋（めぐ）らさずして敵により死す。今、復（また）此の子を吮わば、妾（わらわ）其の死所を知らざらむ！」と。  
梅堯臣曰く、撫して之を育めば、則ち親しみて離れず。愛して之を勗（鼓舞）せば、則ち信じて疑わず。故に、死すと雖も與に死す、危と雖も與に危す。  
王晳曰く、仁恩を以て人心を結ぶなり。  
何氏曰く、後漢の段熲（だんけい）が羌將軍を破るが如し、以て西羌を征すに、行軍すに仁愛、士卒傷つかば、親して自ら瞻省し（見舞い）、手為裹瘡（傷や膿の手当をする）。邊に在ること十餘年、未だ嘗て一日も蓐寢（敷物をして寝ること）せず、將士と苦を同じくす。故に皆樂（この）みて死戰を為す。晉の王濬（おうしゅん）は巴郡の太守と為る。郡邊の吳境では、兵士は役に苦しむ。男が多く生まれるも舉げず。濬は乃ち嚴しく其れ條を科し、其の徭課を寬やかにし、其れ產育（養育）す者は皆て休復（休憩）を與え、全活（天から授かった性質と運命を保全）す所は數千人。及ち後に吳を伐ち、先に巴郡に在る所の全活者は、皆て、徭役供軍に堪える。其の父母は之に戒めて曰く、「王府の君は爾を生かせり。爾は必ず之に勉めよ、死を愛しむこと無きなり」と。故に吳に子有るは父子の兵。  
張預曰く、將が卒を視ること子の如くば、則ち卒が將を視ること父の如し。未だ父が危難に在りて、子が死に致らざること有らず。故に荀卿の曰く、「臣の君に於るや、下の上に於るなり。子弟が父兄に事（つか）えるが如し、手足が頭目を捍（ふせ）ぐが如きなり」と。夫れ美酒が泛（あまね）く流れば、三軍の皆は醉う。溫言で一撫せば、士は同じく挾纊す（綿衣に包まれたように暖かく感じる）。信か、恩を以て下に遇すは、古人が重きとする所。故に、『兵法』に曰く、「勤勞の師とは、將が必ず先ず己から、暑くとも蓋（陽よけの天蓋）を張らず、寒くとも衣を重ねず、險しくば必ず下りて步き、軍の井が成りて而る後に飲み、軍の食熟して而る後に飯（くら）う、軍の壘が成りて而る後に舍せ」と。  
  
（厚而不能使，愛而不能令，亂而不能治，譬若驕子，不可用也。）  
曹操曰く、恩は專に用う可からず、罰は獨り任す可からず。驕子の喜怒の若し、目（条目）に對し害を還す、而して用う可からず。  
李筌曰く、厚く人を愛しむと雖も、令さず驕子の如きは、勃逆（叛逆）の心を有（たも）ち、用う可からず。  
杜牧曰く、黃石公曰く、「士卒可下，而不可驕」と。夫れ恩を以て士を養い、謙を以て之に接す。故に「下る可し」と曰う。之を制すに法を以てす。故に「驕らす可からず」と曰う。『陰符』に、「害は恩に生ずと」曰う。吳起が曰く、「夫れ鼓鼙金鐸は耳を威す所以。旌旗麾章は目を威す所以。禁令刑罰は心を威す所以。耳を聲により威せば、不清を得ず（はっきり聞こえる）。目を色により威せば、不明を得ず（はっきり見える）。心を刑により威せば、不嚴を得ず（厳しく心得る）。三者が立たずんば、必ず敵に敗れる。故に曰く、將の撝（指揮）す所、移（改変）に從わざること莫し。將の指す所、前（さき）に死せざること莫し」と。衛公李靖が曰く、「古の善く將と為すは、必ず能く十卒をして其の三を殺す、次は、十に其の一を殺す。十に其の三を殺すとは、敵國に威振す。十に其の一を殺すは、三軍に令行す。是れ我を畏れる者は敵を畏れず、敵を畏れる者は我を畏れざるを知る」と。善（行）細も無くば賞せず、惡（行）微も無くば貶めず。馬謖が軍を敗り、諸葛亮は對泣（相対して哭泣）し行を誅す。鄉人が笠を盜み、呂蒙は涕を垂れて後に斬る。馬を逸し禾を犯し、曹公は髮を割きて自らを刑す。兩の掾（官名；補佐官）辭して屈すも、黃蓋は詰問して俱に斬る。故に能く威が其の愛に克てば、少と雖も必ず濟（すく）われる。愛が其の威に加われば、多と雖も必ず敗れる。  
孟氏曰く、唯に務めて恩を行わば、恩の勢は已に成る。之を刑せば必ず怨む。唯に務めて刑を行わば、刑の怨は已に深く、之に恩しても附かず。必ず恩威を相い參（まじ）え、賞罰を並び用いしめば、然る後に以て將と為す可し、以て眾を統べる可し。  
梅堯臣曰く、厚く養いて使わず、愛しみ寵して教えず、法を亂して治めず。猶如驕子（駄々っ子のようでは）、安（いづ）くんぞ得て用いむや？  
王晳曰く、恩が以て嚴しくなくば、未だ濟（すく）う可からず。  
何氏曰く、言うは、恩は純（ひたすら）任す可からず、純任せば則ち還りて己が為に害さる。  
張預曰く、恩は以て專用す可からず。罰は以て獨り（独断して）行う可からず。專（もはら）に恩を用いば、則ち卒は驕子の如くにして使うこと能わず。此れ曹公が髮を割きて自ら刑す所以。臥龍（諸葛亮）が垂泣して戮を行う所以。楊素が流血盈前（目前流血だらけ）にして自若として言笑（談笑）する所以。李靖が十に其の三を殺し我を畏れて敵を畏れざらしめる所以なり。獨り罰を行わば、則ち士は親附（親近依附）せずして用う可からず。此れ古將が投酒す所以。楚子が挾纊す所以。吳起が衣食を分つ所以。闔閭が勞佚を同じくす所以なり。『易』の〈師〉に在る「初六」に曰く、「師は出づに律を以てす」と。眾を齊すに法を以てすを謂うなり。「九二」に曰く、「師中に天寵を承く」と。勸士に賞を以てすを謂うなり。此を以て之を觀るに、王者の兵は、亦、德刑を參えて任じ、而して恩威を並びて行う。尉繚子が曰く、「其の心を愛しみ悅ばせずんば、我は用いず。其の心を嚴しく畏れずんば、我は舉げず。……故に善き將は、愛と畏のみ」と。  
  
（知吾卒之可以擊，而不知敵之不可擊，勝之半也；）  
梅堯臣曰く、己を知りて彼を知らずんば、或は勝つこと有るのみ。  
  
（知敵之可擊，而不知吾卒之不可以擊，勝之半也：）  
杜牧曰く、擊つ可き者は、勇敢にして輕死すなり。擊つ可からざる者は、頓弊（頓挫疲弊）にして怯弱なり。  
陳皥曰く、此の說は非なり。可擊、不可擊とは、所謂「兵眾孰（いづれ）が強き？士卒孰が練（鍛錬）す？賞罰孰が明（明瞭）か？」なり。  
梅堯臣曰く、彼を知り己を知らずんば、或は勝つこと有るのみ。  
王晳曰く、己を知り彼を知らぬ、彼を知りて不己を知らずんば、皆て未だ以て決して勝つ可からず。  
張預曰く、或は己を知りて彼を知らず、或は彼を知りて己を知らずんば、則ち勝つこと有れば負けること有り。唐の太宗が曰く、「吾は嘗て陳に臨み、先ず敵心と己の心孰（いずれ）が審（つまひらか）かを料り（善し悪しを見分け）、然る後に彼が得可しと知れり。敵氣と己の氣孰が治（おさま）れるかを察し、然る後に我が得可しと知れり」。言うは、心審治亂を料り、氣を察し強弱の形を見て、戰う可しと戰う可からずとなる。  
  
（知敵之可擊，知吾卒之可以擊，而不知地形之不可以戰，勝之半也。）  
曹操、李筌曰く、勝の半ばとは、未だ知る可からざるなり。  
杜牧曰く、地形は、險易、遠近、出入、迂直なり。  
梅堯臣曰く、彼が己を知り、而して地形を知らずんば、亦或は勝たず。  
王晳曰く、彼も己も知り以て戰う可しと雖も、然り地利を虧く可からず。  
張預曰く、既に己を知りて又彼を知るも、但に地形の助を得ずんば、亦全勝（完勝）す可からず。  
  
（故知兵者，動而不迷，舉而不窮。）  
杜牧曰く、未だ動かず未だ舉げずして、勝負已に定まる。故に、動きて則ち迷わず、舉げて則ち窮せず。一に云う、「動きて困せず、舉げて頓せず」と。  
陳皥曰く、窮とは困なり。我が彼此の動否を識るが若きは、地形の得失を量り、則ち進みて迷わず、戰いて困せざる者なり。  
梅堯臣曰く、知らざる所無く、則ち動きて迷闇（迷惑暗昧）せず、舉げて困窮せず。  
王晳曰く、善く計る者は迷わず、善く軍す者は窮まらず。  
張預曰く、妄動せず、故に動きて則ち誤らず。輕舉せず、故に舉げて則ち困せず。彼我の虛實を識り、地形の便利を得、而して後に戰う。  
  
（故曰：知彼知己，勝乃不殆；）  
張預曰く、攻守の術を曉（さと）らば、則ち勝つこと有りて危きこと無し。  
  
（知天知地，勝乃不窮。）  
李筌曰く、人事、天時、地利、三者を同じく知らば、則ち百戰して百勝す。  
杜佑曰く、地の便を知り、天の時を知る。地の便は、險阻に依り、高陽に向うなり。天の時は、寒暑に順い、刑德に法（のっと）る。既に能く彼を知り己を知り、又地形を按じ、天道に法るなら、勝は乃ち全きとなる可し、又何ぞ難（かた）きや？  
梅堯臣曰く、彼の利を知り、此の利を知れば、故に危うからず。天の時を知り、地形を知れば、故に極まらず。  
王晳は梅堯臣が註に同じ。  
張預曰く、天の時に順い、地の利を得れば、勝を取ること極まること無し。  
　  
了　2020.05.21　修正　2020.12.04